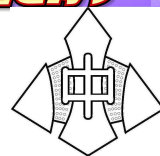


手をたずさえて

“小原田PRIDE”～自信と誇り

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒



令和3年4月28日（水）発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋

保護者の皆様へ

4月30日に予定しておりました「学年懇談会」を中止としたため、当初、懇談会の際に各学年をまわってお話する予定だった内容を掲載しましたので、ご一読ください。併せて、これから始まる大型連休の過ごし方及び新型コロナウイルス感染症対策の徹底について、ご家庭でのご指導をお願いいたします。そして、今後も本校の教育活動に対するご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。

“中学校で学ぶ”ことの意味

「中学校を卒業する」ということは、「自分の進路を決めること」でもあります。中学生の最終的かつ最大の目標は、大部分の生徒にとっては「人生で初めて“自分の進路を決めること”」です。

生徒にとって、進路選択は人生の最初の関門であり、大きな試練でもあります。したがって、「自分の進路を決める」ために必要なことは何なのか、ということを考え実行していくことが、中学校の学びの最重要事項となります。授業、係活動、部活動などの学校での生活・学習や、家庭での生活・学習はすべて繋がっており、中学校で学ぶことすべてが進路選択や進路決定にかかわるということを認識する必要があります。

その上で、各学年の特性を踏まえての“生徒に望むこと”が次のとおりです。

1 年 生

- ① 生活習慣づくり・学習習慣づくり
→1日の生活リズム：規則正しい生活、食事、睡眠等学力を下から支えるもの、家庭学習時間の確保
- ② 活字を読むこと、文字を書くことを大切にしたいということ
読書の奨励、様々な場面で自分の考えを書くこと、書いて覚える学習方法など
- ③ 「進路」への意識を持つこと～「進路」に向けての動きは、すでに1年生から始まっている

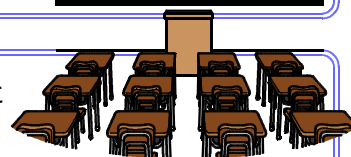
2 年 生

- ① 学校の「要」としての役割→年度途中からは2年生が生徒会・部活動のリーダー
- ② 「中だるみ」「変化」の時期：2年生が“中学校の大きなターニングポイント”
→自己をしっかり見つめることのできる眼を養う（善悪の判断など）
- ③ 自分なりの学習方法の確立～「進路」への準備本格化



3 年 生

- ① 悔いの残らない学校生活の実現～一日一日を大切にしたいということ
- ② 学校を牽引していく力に期待（生徒会、学校行事、部活動など）
- ③ 進路に向けて大切にしたいこと
→目的意識の明確化、家庭での対話、学級・学年の協力体制や雰囲気「受験は“団体戦”」
- ④ より実効的な学習と毎日の積み重ね
→1冊の問題集を徹底的にやること、わかるまで質問して解決する姿勢など



タブレット端末 1人1台配備される！

昨年度から始まったタブレット端末（Wi-Fi型iPad）の整備作業がいよいよ大詰めとなりました。LET型タブレット端末電波改善工事と高速校内LANの敷設工事が終了し、4月13日には209台のタブレット端末（Wi-Fi型iPad）が届きました。これで生徒1人に1台のタブレットを配当できます。

使いやすさを考慮し、4月22日には1・3年生は各階の資料室（2年生はパソコン室）に充電保管庫の設置作業が行われました。

もうすぐ使用が可能となります。様々な授業等で積極的に活用してほしいと思います。さらに、感染症や災害等の非常時の際にタブレットを家に持ち帰り、オンライン授業やオンライン学習に対応できるよう、教育委員会においてガイドラインを作成中です。



「やっと自分たちの時間が動き始める」



この言葉は、道路を運転中に熊本地震による土砂崩れで行方不明になった大学生の話で、熊本県南阿蘇村の黒川で、およそ4カ月にわたり、いとしい息子を捜し続けた両親と兄。現場で発見された遺体が収容されたのを対岸の崖の上から見届けた父親が言った言葉です。

大和晃さん(当時22歳)は2016年4月16日未明、同月14日の前震で被災した熊本市の友人宅に水を届けて阿蘇市の自宅に帰る途中、阿蘇大橋付近で行方不明になった。本震による土砂崩れに巻き込まれたとみられる。2次災害の恐れがあるとして、県などが捜索を打ち切る中、両親は自力で捜索を続けて同年7月に川底にある晃さんの車を発見。地震発生から4ヶ月後の8月11日に車内から遺体が収容された。

熊本地震で行方不明となっていた大学生の息子の車を、家族らが自力で見つけ出したというニュースは、瞬く間に全国へと広がり、驚きと同時に感動を呼んだ。家族らの執念の捜索で、奇跡的に発見することができたというこの出来事の裏には、我々には想像もつかないほどの家族の強い想いと行動力があったのだと思います。

報道陣の取材に応じた父親の卓也さんは「この4カ月間、自分たちは時間が止まっているようだった」と振り返った。そして涙を浮かべながら「長い間寂しかっただろうけど、これで安心してくれと言いたい」と息子の晃さんへの思いを吐露した。

「やっと自分たちの時間が動き始める」

遺体を乗せたヘリが現場を飛び立つと、卓也さんら3人(両親と兄)は離れていくヘリに祈りを捧げ、何度もおじぎを繰り返していた姿が印象的でした。【写真】

家族の執念、そして、家族愛(家族の絆)、さらには、命の大切さ、というものを考えさせられた出来事でした。先日、5年が経過した現在の大和さん一家の様子がテレビで映し出されましたが、5年たった今でも家族の心の傷は癒えていないという状況が伝えられました。

270人以上が犠牲となった一連の熊本地震の発生から5年が経過しました。今も400人余りが避難生活を余儀なくされています。この災害においても、過去の災害と同様に癒やされない悲しみや苦労をずっと背負い続けている人々がたくさんいるということです。

災害や事故はいつ自分にふりかかってくるかわかりません。災害や事故は当事者はもちろんですが、まわりの人々を深い悲しみや苦しみのどん底に陥れます。そして、災害や事故には、どうしても「防ぎきれないもの」と「防げるもの」とがあります。だからこそ、「防げるもの」は、自分の責任において防いでいかなければならない。「自分の命は自分で守ること」が基本になります。

毎回、避難訓練で「無言で迅速に真剣に避難しなさい」と言われても、できない人がいる。様々な場面で様々な人達から交通事故防止についての注意や話がされているにもかかわらず、交通ルールやマナーを守れない人は後をたたない。

人は、どうしても「他人事」としてとらえてしまう。その「他人事」を「自分事」として考え、行動できれば…。自分自身の命を守ること。自分のために、そして家族や周りの人々を悲しみの渦に巻き込まないためにも…。

「安全は 小さな注意の 積み重ね」 「事故防止 他人事から自分事へ」

3月には福島県沖地震が発生しています。「東日本大震災を経験した福島人」として、あの大地震を風化させてはならないと強く思います。そのためにも、この「避難訓練」を決して馬鹿にしてはいけなく、軽んじてはいけなく、ということをご確認しておきたいと思ひます。